



一带一路沿线国家
语言文化研究丛书

主 编◎陈多友

日本新现实主义文学 研究与文本赏析

(日文版)

副主编◎李莉薇



上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS

陈多友（1964— ），安徽淮南人，文学博士，现任广东外语外贸大学日语语言文化学院暨亚非语言文化学院院长、教授、博士生导师，《東アジア文化研究》杂志主编，教育部高等学校外语教学指导委员会日语专业指导分委员会委员、中国日语教学研究会副会长兼华南分会会长、中国东方文学研究会副会长、中国比较文学教学研究会副会长、广东省本科高校外语类专业教学指导委员会副主任委员等职务。

主要研究方向：海外中国学研究、中日比较文学。近十余年来，出版专著《研文肆言——文与中日文学研究》《日本游沪派文学研究》等多部；译著《日本近代国语批判》《天皇的玉音放送》《日本生态文学前沿理论研究》等40余部；主编、参编专业教材50余部；在国内外公开发表学术论文60余篇；主持国家社科基金项目《文心雕龙日本百年传播史研究》等多个项目。



一带一路沿线国家
语言文化研究丛书

丛书主编◎陈多友

日本新现实主义 文学研究

李莉薇◎著



上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS

内容提要

本书充分考虑新现实主义流派的整体性,在梳理新现实主义文学的发展脉络和代表作家芥川龙之介、久米正雄、菊池宽、丰岛与志雄四人的文学创作轨迹的基础上,精选 13 篇不同题材的新思潮派文学作品作为较为详细的评介与注解,以便于对日本文学感兴趣、对新现实主义文学感兴趣的日语学习者学习与研究。

图书在版编目(CIP)数据

日本新现实主义文学研究与文本赏析:日文 / 陈多友主编.

—上海:上海交通大学出版社,2020

ISBN 978-7-313-22923-6

I. ①日… II. ①陈… III. ①现实主义-文学研究-日本-日文 IV. ①I313.06

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2020)第 024998 号

日本新现实主义文学研究与文本赏析(日文版)

RIBEN XINXIANSHIZHUYI WENXUE YANJIU YU WENBEN SHANGXI (RIWENBAN)

主 编:陈多友

出版发行:上海交通大学出版社

邮政编码:200030

印 刷:当纳利(上海)信息技术有限公司

开 本:787mm×1092mm 1/16

字 数:260千字

版 次:2020年3月第1版

书 号:ISBN 978-7-313-22923-6

定 价:62.00元

地 址:上海市番禺路951号

电 话:021-64071208

经 销:全国新华书店

印 张:12.75

印 次:2020年3月第1次印刷

版权所有 侵权必究

告 读 者:如发现本书有印装质量问题请与印刷厂质量科联系

联系电话:021-31011198

前 言

文学作为人类一种重要的精神活动方式,是用来满足人类精神需求的。无论古今中外,人们都习惯于把文学比喻为人类的精神食粮。这充分说明文学之于人类,具有极其珍贵的意义与价值。但是文学的含义与范畴在不同的时期有不同的理解与表述。特别是近代以来随着西学东渐大潮的汹涌而至,东方语境中的“文学”观念发生了很大的改变。中文里所说的“文学”与英语里的“literature”相遇,并形成对译的词语应该是在 19 世纪中叶。这“文学”一词里所包涵的意义发生了实质性的变化。在对“文学”进行再认识的过程中,中国知识界通过日本这个中转站进一步汲取西方文艺思潮,对文学作出了重新的界定:文学是以语言文字为工具,形象化文字化地反映客观现实的艺术,它包括诗歌、散文、小说、杂文、歌词、剧本、学术等一切形式和内容。时至今日,人们对近代以来重新规定的“文学”观念早已习以为常,但是人们对文学的认知、考辨却远远没有结束。或许可以说,只要人类社会一直存在,文学也将会一直形影相随。

如前所述,近代日本是近代以来中国知识分子认识世界、学习西学的一个很重要的途径。近代日本文学对中国文学的影响以及启发意义也是全方位的、巨大的。因此,日本近代文学(史)研究始终是国内日本文学(史)研究当中最为引人注目,研究也最为充分的领域。大正时期兴起的新现实主义文学是近代文学当中一个重要的流派。以芥川龙之介为首的新现实主义派(又称新思潮派)文学不同于自然主义的日常性、平板性,也不同于耽美派的享乐主义、理想派的乐天性。新现实主义派文学的根本思想是以源于近代西欧的个人主义、自由主义的眼光来审视、来反思人的复杂心理、人的认知和社会现象。芥川龙之介、久米正雄、菊池宽、丰岛与志雄等以小说、戏剧、俳句等多种丰富的文体展示了新现实主义文学的魅力。尤其是芥川龙之介的文学不仅在日本影响很大,而且通过翻译,在整个东亚的影响都很大。在近百年来中国的日本文学接受史当中,芥川龙之介是被研究得最多的一位。新现实主义以其深刻的思想性与近代性强烈地引起中国读者的共鸣。因此,今天我们重读发端于大正时期的新现实主义文学也不失其时代意义与价值。

目前国内关于芥川的研究是非常丰富且充分的。但是对于新思潮派其他作者的作品则关注不多,更甚少有新思潮派的专题研究。我们很有必要更进一步深入地了解新现实主义文学,对其进行恰如其分的赏析与研究。有鉴于此,本书充分考虑新现实主义流派的整体性,在梳理新现实主义文学的发展脉络和新思潮派代表作家芥川龙之介、久米正雄、菊池宽、丰岛与志雄四人的文学创作轨迹的基础上,精选 13 篇不同题材的新思潮派文学作品作为较为详细的评介与注解,以便于对日本文学感兴趣、对新现实主义文学感兴趣的日语学习者进行学习与研究。

本书的编选主要结合了编者多年的教学实践与研究心得,但囿于编者的学识与能力的不足,若有疏漏谬误之处,敬祈读者批评斧正。

编者

目次

第一章	新現実主義(新思潮)派文学を理解する ——芥川龍之介『羅生門』を手がかりとして	1
第二章	新現実主義(新思潮)派及びその研究	4
	新現実主義(新思潮)派	4
	新現実主義(新思潮)派の研究軌跡	9
第三章	新現実主義(新思潮)派及び文学創作	23
	芥川龍之介とその文学創作	23
	久米正雄とその文学創作	30
	菊池寛とその文学創作	33
	豊島与志雄とその文学創作	37
第四章	芥川龍之介作品鑑賞	40
	解嘲	40
	河童	46
	羅生門	89
	蛙	98
第五章	久米正雄作品鑑賞	101
	良友悪友	101
	手品師	113
	私の社交ダンス	121
第六章	菊池寛作品鑑賞	128
	出世	128

青木の出京	138
入れ札	160
白雪姫	174
第七章 豊島与志雄作品鑑賞	187
帰京記	187
明日	190
参考文献	195

第一章 新現実主義(新思潮)派文学を理解する

——芥川龍之介の『羅生門』を手がかりとして

芥川龍之介は新現実主義(新思潮)派の中心的な存在であって、またその同時に新思潮派乃至大正文学を象徴する代表的な文学者と言ってもいい。芥川は東西の教養が豊かで、早くから創作の意欲を見せた。彼の短い創作生涯において、豊富な小説作品が残された。彼の作品には多くの作風を試み、しかも各時期においてかなり違うと言われる。芥川龍之介の作品は20世紀20年代既に中国語に翻訳され、中国の知識人に広く読まれてきた。特に、彼の死後、芥川龍之介を論ずるブームも起こり、中日文学交流史上の独特な現象となった。芥川龍之介は中国において、最も関心を寄せる日本人作家と言われている。従って、新現実主義文学を理解するため、あるいは芥川龍之介文学の原点を理解するために、芥川龍之介の作品『羅生門』を手がかりとして、読み返すことにする。

『羅生門』の解釈として長く定説とされたのは吉田精一の見解である。

龍之介はこの単純な原文(今昔物語)の筋に、近代的な味を加へ、盗人の代りに主家から暇を出されて生活難に苦しむ下人を主人公とした。彼は生きる為には盗人になるより仕方がないと思ふが、その決心もつかない。それが羅生門上で死人の髪を抜く姫を見て、先に盗人にならうと思ったことも忘れて、一度は義憤に燃え、斬ってすてようとする。しかし死人も生活のために悪を冒した女であり、老婆も生きる為に、やむなく死人の髪を抜いて鬘を作るのだときいて、彼はまた決然として引剥になって、老婆を剥ぎとる。この下人の心理の推移を主題とし、あわせて生きんが為に、各人各様に持たざるを得ぬエゴイズムをあばいてあるものである。^①

吉田氏の見るように下人が老婆の弁明を「きいて、彼もまた決然と」翻意し、確信を得て「引剥」に及んだのなら、『羅生門』のドラマは確かに「各人各様」の「エゴイズム」が露呈した物語だといってよい。しかし、果たしてそうだろうか。

一方、三好行雄は『羅生門』の世界が「エゴイズムなどという概念では決して律しきれ

① 吉田精一：『芥川龍之介』，新潮文庫，1958年1月。

ない」究極的な「新しい認識の世界」だとし、飢餓という絶対的な死の状況下では、善・悪といった相対的な「倫理」の「精神性」が無力だとし、次のように述べる。

『羅生門』のドラマはいかなる救済をも拒否する。精神性をまるごと剥離された生の裸形、その剥き出しの我執はもはや罪ではなく、人間存在の免れがたい石のような事実である。(中略)芥川龍之介が『羅生門』で描いて見せたのは地上的な、あるいは日常的な救済をすべて断たれた存在悪のかたちである。^①

しかし、三好氏の力説とは裏腹に、作中の描写では、下人の悩みはまだ「明日の暮らし」にすぎないし、「餓死」の危険も目前ではない。現に「手段」を「選ばないとすれば」の「すれば」は「何時までたっても、結局『すれば』であった」し、「『盗人になるより外に仕方がない』と云ふ」結論も「積極的に肯定する丈の勇氣」をもつ必要があった。しかも「今日の空模様も少からずこの平安期の下人のSentimentalismに影響」している。つまり、下人の「餓死」は危急のリアルな現実ではなく、感傷に包まれた観念的論理の産物なのだ。その顔に「大きな面砲」があるように、下人の思考は若者らしい稚気を帯びた青臭い〈倫理〉を脱してはいない。したがって、死体の髪の毛を抜く老婆の前に立ちふさがるのは、「飢餓の極限」にある「剥ぎ出し」の「我執」の持ち主などではない。つい先刻まで「あらゆる悪に対する反感」に燃えていた若者は、老婆の生きる為に「仕方なくした」行為は「許」されるという弁明(言い訳)にむしろ反発を覚え、底意地悪く老婆の論理の穴を捜していたのであろう。老婆の話聞く下人の反応は極めて冷淡なもので、彼の心は少しも動いていない。それでも、下人が老婆を「引剥」するのは、老婆の「仕方がない」という論理を突き破る「飢ゑたものは、盗んでいい」という積極的な断言に倣って自身の〈行動〉への「勇氣」を確認したかったからだ。「きっとさうか」と「嘲るやうな声」で念押しする下人は、もはや小説前半の迷える青年ではない。彼は老婆の論理を逆手にとる妙案を思いつき、「すばやく、老婆の着物を剥ぎとる」。初出末尾の一行が「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつつあった」と結ばれるのは、下人がその「引剥」行為を〈行動〉への勇氣のあかしと考え、老婆の論理に触発されたのではなく、論理の〈穴〉をついた自身の意志による決断だったからである。「飢ゑたものは、ぬすんでいい」という明快な断言は通俗的な社会論理を突き破る新たな論理であり、失恋後の青年作家芥川龍之介にとって「沈んだ」気分を吹き飛ばす「愉快的」声だった。

無論、芥川にとって、餓死はまだ観念の世界でしかないし、極限状況のもとで人間はどうあるべきかの解答も見えていない。しかし、たとえ作品世界の中とはいえ、下人の

① 三好竹雄：「無明の闇」：『芥川龍之介論』，筑摩書房，1976年9月。

「引剥」行為は、もっぱら現実世界の傍観者に止まりがちだった青年芥川の〈壁〉を打ち破る一つの決断だった。それは醜悪な現実の前に屈服する「仕方がない」論理にただ従うのではない新たなモラルの摸索であり、若々しい叫びでもあった。

しかし、『羅生門』は発表当時全く注目されていなかった。後に芥川龍之介は回想の中で、黙殺に等しかった状況を繰り返し述べている。例えば、芥川の書いた『あの頃の自分の事』には以下のような一節がある。

その発表した『羅生門』も、当時帝国文学の編集者だった青木健作氏の好意で、やっと活字になる事が出来たが、六号批評にさへ上らなかった。のみならず久米も松岡も成瀬も口を揃へて悪く云った。それから自分の高等学校以来の友だちの中には、一体自分が小説を書くのが不見識なのだから、匆々やめるが好いと意見の手紙をよこした男さへゐた。

この一節も小説である以上、多少の誇張は免れない。しかも、処女創作集『羅生門』の刊行から二年後、すでに人気作家になっていた余裕の言でもある。同様の発言は「小説家を書き出したのは友人の煽動に負ふところが多い」にも見られ、『『ひよつとこ』も『羅生門』も『帝国文学』で発表した。勿論両方とも誰の注目も惹かれなかった。完全に黙殺された。現に『羅生門』の如きは、今日親しく交際してゐる赤木桁平すらも黙殺した」と述べ、江口渙宛書簡(1917年)でも『『羅生門』は当時多少得意の作品だったんですが、新思潮連には評判が悪かったものです。成瀬が悪評の張本だったやうに想像しています」と語っている。しかし、芥川が「黙殺」の過去を繰り返し語るのは、逆に彼の『羅生門』に対する強い自負と愛着を物語る。それを証するように、発表からほぼ二年後には自身の処女短編集の表題に選んだのである。^①

小説の世界が現実のアナログカルな〈再生〉ではなく、それと深く繋がりつつも「対立」する〈転位〉された時空であり、小説の「言語」が一義的な意味を逸脱しながら〈変奏〉を不可避とする以上、小説の本質は〈解答〉を示すことではなく、止まることのない〈問い〉の持続性にある。とすれば、定稿では下人の人生の行方を「誰も知らない」として〈問い〉を夜の暗闇に投げかけ、「目撃者」の位置に踏み止まり、その眼を光らせ続けた『羅生門』こそ、〈小説の起源〉と示す現場だったと言えよう。

① 浅野洋：『小説家たちの起源(3)芥川龍之介：「羅生門」再読』、近畿大学大学院文学研究科編『渾沌』2012年9号。

第二章 新現実主義(新思潮)派及びその研究

新現実主義(新思潮)派

雑誌『新思潮』は、明治四十年(1907年)十月創刊の第一次以来、東大文科関係者を中心に十数次にわたって発刊されてきた同人雑誌であるが、そのうち特に、大正期に華々しい活躍を見せた、第三次(1914年)、第四次(1916年)の構成メンバーを中心に、「新思潮派」と呼ぶ。芥川龍之介、菊池寛、久米正雄らがそれに当たり、新現実主義の一派として、「新技巧派」とも称された。

新現実主義(新思潮)派の成立

新現実主義成立の時代思潮

新現実主義は、第一次世界大戦による世界的規模を持った社会的変動を背景とする。大規模な戦乱の影響するところは大きかったが、その影響が個我の枠内に止まるところが新現実主義となり、個我の枠をこえて社会的なつながりを強く意識して文学的昇華が期されたところにデモクラシーから民衆芸術、労働文学、第四階級の文学、プロレタリア文学の流れが考えられることになった。

すなわち新現実主義は、自然主義の日常性・平板性や、耽美派の享楽や官能的デカダンス、理想派の楽天性を排し、現実を新しい認識のもとに把握しようとした。その根底には西欧近代の個人主義・自由主義があり、複雑な人間心理や社会現象を個性的な自我の匂いの強い理知や感性に基づいて、認識し、判断し、解釈しようとしたのである。その場合に、個我を納れる社会機構の根源にまで現実の問題を掘り下げ、その構造的矛盾の剔抉にまで徹底しようとしないうちに、社会主義文学と一線を劃する特質があった。

文学史における新現実主義(新思潮)派

先蹤となった第三次『新思潮』は、大正三年(1914年)二月に創刊され、巻頭に「吾々は曰ふべき多くの事を持っているやうな気がする。さうしてその量が嵩むにつれて黙っていることの苦痛に耐へられなくなった。茲からこの雑誌が生まれたのである。同人全体としては一定した主義もなければ主張もない。／新思潮と言ふ名はこの仕事をするのに都合がよいといふので譲ってもらったのである」と記されている。全八冊(1914年)を刊行し、同年の九月を以って終刊となった。同人には山宮允らとその一高時代の知友、豊島与志雄、山本有三、土屋文明、久米正雄、佐野文夫、芥川龍之介、菊池寛、成瀬正一、松岡譲等が集まった。海外思潮の移入紹介では山宮の翻訳・評論活動が目立ち、小説では象徴的な手法によった豊島与志雄の『湖水と彼等』(1914年)が、また戯曲では社会劇への志向を見せた久米正雄の『牛乳屋の兄弟』(1914年)がそれぞれに好評を得た。大正五年(1916年)二月、第四次『新思潮』が創刊された際の同人は、芥川龍之介、久米正雄、菊池寛、松岡譲、成瀬正一の五人である。第三次時代のように著名作家の寄稿を仰ぐことはなく、翻訳や評論も姿を消して、同人による創作本位の編集に徹した。夏目漱石の知遇を得、その評言を大きな励みとして創作に当たったが、中でも創刊号に掲載された芥川の『鼻』が漱石の激賞に浴し、幸運な文壇デビューのきっかけとなった話によく知られている。掲載は『帝国文学』(1915年)であるが、『羅生門』も逸することのできない作品である。また菊池寛は戯曲『屋上の狂人』『父帰る』(1917年)によって、久米正雄は小説『手品師』(1916年)と戯曲『阿武隈心中』(1916年)によって、力量を示した。

第三次、第四次『新思潮』とその同人

『新思潮』は日本の文芸誌である。『帝国文学』に対抗して明治四十年(1907年)小山内薫が創刊した総合的な文芸雑誌である。チャーホフの翻訳やイプセン研究会の記録などが掲載し、6号まで刊行した。以後、東京帝国大学の大学生(以下「帝大生」と略す)により復活され、東京大学(当時は東京帝国大学)の同人誌として後に続いた。第二次の『新思潮』は帝大生の谷崎潤一郎らが参加した。谷崎はデビュー作『誕生』や出世作『刺青』などを発表した。特に第三次(1914年)、第四次の『新思潮』(1916年)の同人菊池寛、芥川龍之介、久米正雄、山本有三、松岡譲、豊島与志雄らを「新思潮派」と称する。久米正雄が戯作家として、豊島与志雄が小説家として世に出た。第四次『新思潮』創刊号に掲載された芥川龍之介の『鼻』が夏目漱石に激賞され、芥川龍之介、久米正雄が小説家として世に出た。『新思潮』は大正文学の一つの拠点になった。「新思潮」の名は前任者の了解を取れば誰でも使用する事が出来た。

新現実主義(新思潮)派の展開

大正五年(1916年)十二月九日漱石の死は、第四次同人にとっての大きな転換点となるが、翌年三月に「漱石先生追慕号」を出した後、「社告」で見せた編集方針拡大の計画を実現できぬまま、活動を停止することになった。芥川龍之介は『地獄変』(1918年)等の歴史小説、『奉教人の死』(1918年)の切支丹物を発表した。内外の作品に材を取りつつ、相対主義的視点の導入によってメスを振るう鮮やかな手並みを披露した。群を抜いた表現力を駆使して、大正期を彩る花形作家の地位を不動にした。菊池寛は小説に転じてから『中央公論』の滝田樗陰に見出され、『忠直卿行状記』(1918年)等を同誌に掲載した。骨太な常識感覚と明快な切口とによってテーマ小説の典型を為したが、大正九年(1920年)の『真珠婦人』で、絶大な人気を得た後、通俗小説作家としての道を歩んだ。また大正十二年(1923年)一月『文芸春秋』を創刊してからは、ジャーナリストとしての才を発揮し、文壇の内外に大きな力を持つに至った。久米正雄は、『地蔵教由来』(1917年)や『虎』(1918年)に腕を振ったものの、『蚩草』(1918年)の成功によって、通俗小説に転じた。

芥川龍之介の新技巧

芥川龍之介の小説が、意識的に計算された緻密な構成と、効果的に選択された独自の文体とを備えていたことは、彼の作品の中でどの一篇についても言い得る。隅々まで効果の計量された知的操作による制作の方法は、初期であろう、晩年であろうと、一貫して変るところはなかった。すべての芸術活動が意識的かどうかは知らない。俳諧などの特殊な文学、ある種の絵画や音楽などには、意識的な計らいを捨て去った、自らなる流露と結晶によるものがないわけではない。しかし、そこに見られるものは、意識を尽くしきったところに現れる無意識の境にちがいない。だが、小説はあらゆる芸術の中で、その方法がもっとも意識的なものである。わけても、凝縮した形で、人生の断面を見せるはずの短篇小説の方法が、高度の知的操作を要するものであることは当然である。舞台と人物の選択は、時間的空間的に奔放自在を極めている。古今を問わず、東西にわたっている。王朝期あり、江戸期あり、開化期あり、大石内蔵助あり、滝澤馬琴あり、松尾芭蕉あり、鼠小僧次郎吉あり、ツルゲネーフあり、盗人あり、殺人者あり、姫者あり、将軍あり、様々な人物が芥川の小説に登場する。文体もまた、客観描写体、独白体、書簡体、談話体、問答体などあらゆる種類を駆使し、あるいは欧文脈、漢文脈、南蛮語調、翻訳調、談話調など、時により、場合に応じ、変幻の妙をつくしながら、しかも歴として芥川自身の文体を作り出している。形式としては、童話、散文詩、スケッチなど、およそこれほど奔放自在な知的操作による多種多様な形式の小説というものは、

まったく例を見ないものといってよい。以上は何も初期の作品についていうのではない。晩年の諸作、『点鬼簿』『玄鶴山房』『蜃気楼』『河童』『齒車』『闇中間答』『或る阿呆の一生』『西方の人』などいうまでもなく、『或る旧友へ送る手記』の遺書にいたるまで、このことは一貫している。

芥川のすぐれた技巧と知性によって意識的に構成された作品は、新技巧派を代表するものと見なされるようになったのである。

早成の才——久米正雄

久米正雄は芥川龍之介・菊池寛とともに、「新思潮派」としてデビューした三人の作家と見られているが、その中でもっとも早成の才を發揮したのは、久米である。大正三年(1914年)に出た第三次『新思潮』では、芥川・菊池はまだ才能が發揮されるに到らず、この時は小説家の豊島興志雄と戯曲家の山本有三・久米正雄の三人が文壇に送り出された。その中で、山本と久米とは勢いライバルとして戯曲に熱中し、久米の『牛乳屋の兄弟』(1914年)は、その歳の秋、新時代劇協会によって、有楽座に上演された。その時の久米は二十四歳、大学二年生であった。

久米の早成の才は、中学生時代から發揮されている。四年生のころから、同級生たちを集めて俳句を作りはじめ、中学の教頭であった俳人西村雪人の指導を受けたため、白面にして当時隆盛をきわめた新傾向俳壇の麒麟児として、目されるに到った。その当時の作品は、大正三年(1914年)に編んだ句集『牧唄』に収められている。だが、第一高等学校(以下「一高」と略す)二年生のころから、当時勃興してきた新劇熱に捕らえられて、俳句を廃し、社会劇と銘打った処女作『牛乳屋の兄弟』(のち『牧場の兄弟』と改題)で、たちまち好評を博した。その後書いた代表的な戯曲には『阿武隈心中』『地藏教由来』『三浦製絲工場主』などがある。久米は『牛乳屋の兄弟』を「日本では最初の写実的な社会劇」として自負していた。

小説を書き出したのは、大正五年(1916年)に芥川・菊池・成瀬正一・松岡譲などとはじめた第四次『新思潮』からで、初号に『父の死』を發表したのをはじめ、『手品師』『競漕』などを書き、その年十一月には、『銀貨』を『新思潮』に發表した。久米の明るくて、若干ペーソスをも具えた新現実主義的作風が認められ出したのは、このころからである。芥川・菊池・久米は、一高時代からの友人であるが、久米に芝居熱を注ぎかけたのは菊池であり、芥川に小説を慫慂したのは久米であるらしい。その芥川が、小説においては『鼻』の一作で、久米にやや先んじて認められ、もっとも劇通であった菊池は、戯曲家としても小説としても、もっとも遅れて登場した。

菊池寛の「テーマ小説」

菊池寛は大正七年(1918年)七月の『中央公論』に『無名作家の日記』を発表し、続けて同誌九月号に『忠直卿行状記』を発表することによって新進作家としての華々しい地位を確立したのである。その後、『青木の上京』『恩讐の彼方に』『ある抗議書』『灰色の欄』『順番』というふうに、大正七年(1918年)から大正八年(1919年)にかけて、ほとんど隔月に『中央公論』に作品を発表している。いまさら断るまでもなく、瀧田樗陰の編集していた『中央公論』の創作欄は、当時最高権威とっていい文壇登竜門にほかならなかった。その当時の自分のことを、菊池寛自ら「旭日昇天の形」で文壇にデビューしていった、と後年回想している。してみれば、最初に『中央公論』に発表した『無名作家の日記』を菊池寛の文壇出世作とよんでもいい。事実、正宗白鳥がこの作品をほめたばかりでなく、一般にも評判がよかったようである。

菊池寛は描写万能の小説手法を信用せず、自分の描写力をカバーするものとして、所謂テーマ小説という新発明を工夫した『恩讐の彼方に』等を見れば、菊池寛が菊池寛なりに懸念な描写を行っていることも明らかだが、芥川龍之介のような独自の文体で読ませる作品を苦手としていたことも事実である。だからこそ、モデル小説と誤解されるような手法を意識的に援用し、そのことによって、作品の主題を効果あらしめようとしたのである。

自由人である豊島与志雄

豊島与志雄は決して孤独ではない。作家として、豊島与志雄は、自由人である。帝大生の時代に、豊島与志雄たちは、第三次『新思潮』を作った。そして、在学中に、作家として登場することができた。そういう意味では、豊島与志雄は、あまり無理をしないで自由人の道へ踏み出すことができたように想像される。

豊島与志雄の作品の中には、自己告白がないのである。もちろん、作家の体験が、かなり生々しい形で使われていることはある。しかし、いわゆるモデルとしては、すべてが漂白されていすぎる。そこに出てくるものは、すべて、「心理」である。心理、感情が、その時々によって、いろいろな肉体を借りるのである。少なくとも、作品に関する限り、心理、感情の動きが骨組としてまとめられる方が先であって、自己の体験であろうと、観察の結果であろうと、そのままでは、とりとめがなくなってしまうのではないかと思われる。

豊島与志雄のヒューマニズムは、徹底したものであるが、一方、非人間的なもの、非情なものに人間的な感情を通じて、そこに愛着を示すことがある。樹木に対する愛がそれである。決着をつける必要がなく、ただ存在し、ただ消えてゆくものが、一種の理想

的な存在の形として感じられるようである。狩猟といえ、残酷なようだが、一発の銃声とともに落ちてくる鳥の姿は、感情のもつれ等を少しも感じさせない単純な決着である。そういう感情が、時々彼の書くものの中に出てくる。

作品のモチーフとしては、決着のつかなさが必要なのであるが、そういうめんどろな状態からは、のがれたいのである。人間と人間との交渉では、無条件の信頼を欲するが、そこへなかなか行けないとなれば、むしろ非情な決着に身を任せる。しかし、その決着も、無拘束であった方がいい。このような徹底的な自由への要求は、昭和七年(1932年)のころから、特に強くなって来ているようである。

新現実主義(新思潮)派文学的意義

大正時代の芥川龍之介を中心とする「新思潮派」は、志賀直哉を中心とする「白樺派」と共に日本近代文学思潮史上において、最後の、しかも重要な二つの思潮と流派である。「新思潮派」は自然主義の「真」、耽美主義の「美」と理想主義の「善」を折衷し、微妙なバランスを保持し、写実、理智、浪漫、理想も備えた近代文学精神として、自分なりの性格を形成した。

そして、新思潮派の中心的存在である芥川龍之介は主流作家として、今も日本の文壇に影響し続けてきた。さらに言えば、東アジアにおいて、芥川龍之介作品の翻訳や伝播を通して、東アジアの文壇にも影響を与えたのである。

新現実主義(新思潮)派の研究軌跡

日本における新現実主義派の研究は、次の表2-1のような成果が見られる。

表2-1 新現実主義派に関する代表的な研究

作者	文章名/書名	出版、発行社と発行時間
片岡良一	近代作家論叢：新現実派の人々	思索社、1949年
江口渙	第4次新思潮前後	『文学』、1950年7月
吉田精一	「新現実派」をめぐる問題——外国文学との関係について	『文学』、1950年7月
広田栄太郎	第四次「新思潮」	『文学』、1957年2月
山宮允	第三次「新思潮」	『文学』、1957年3月
芦田均	「新思潮」の前後	『文学界』、1958年1月